

論文題目：アフリカの初等教育における学習成果向上施策のエビデンスに関する統合分析

氏名：川田 耕造

研究の目的と方法：

サブサハラアフリカの初等教育の就学率は 2000 年代までに大きく改善したが、学校に通っていても十分に学べていない「学びの危機」が近年明らかになっている。教育の「アクセス」の問題は比較的資金で解決しやすい課題であったが、教育の「質」は必ずしも資金だけでは解決しない。2000 年代になると、教育開発の世界においてもどのような施策が学習成果向上に効果があるのかを検証したエビデンスの蓄積が徐々に進み、2010 年代前半になると、そのようなエビデンスを横断的に評価する統合レビューも多く行われるようになった。

それらの統合レビューにおいて、学習成果の向上には、洗練された授業計画の提供や教員へのコーチングなど、教授法に関わる複数の施策を体系的に提供することが効果的であることが明らかになってきた。しかし同時に、ある地域や国で成功を収めた施策が、他の地域や国では同じ結果を生まない「外部妥当性」の課題も出てきている。アフリカの学びの危機を救うには、アジアや中南米ではなく、アフリカでどのようなエビデンスが存在するのかを整理する必要がある。

全世界の開発途上国を対象とした教育施策の統合レビューは 13 件あるが、サブサハラアフリカのみを対象としたものはそのうち Conn (2014) と Evans et al. (2020) の 2 件のみである。「レビューのレビュー」を行った Damon et al. (2016) が明らかにしたように、統合レビューというものはその主旨に反してレビューごとにカバーしている文献が驚くほど異なるものである。完璧な統合レビューというものは存在しえないとも言えるが、その問題を補完する現実的な解決策のひとつは、同じ分野や対象であっても、複数の研究者が統合レビューを重ねて行うことであろう。

また、Conn (2014) と Evans et al. (2020) において、サブサハラアフリカで体系的な教授法の施策を実施したプログラムがいくつか言及・紹介されるが、果たしてサブサハラアフリカではどれ程の数のプログラムがどのような中身で存在したのか、全体像が明らかにされていない。このような情報を整理された形で全体像と共に提示することは、限られた時間で執務にあたるサブサハラアフリカの教育政策決定者や研究者や援助関係者には極めて重要である。

このような背景から、本研究では、Evan et al. (2020) が発表された後のエビデンスも含めながら、明確な検索方針のない Evans et al. (2020) とは異なるシステムティックな方法で、サブサハラアフリカの教授法に関わる学習成果向上策のエビデンスを網羅的に抽出し、それらの文献をプログラム毎にまとめ、それぞれの内容を横断的に整理し全体像を示した上で考察を行った。

調査手法は、まず既存の統合レビューを学術研究データベース検索にて洗い出し個別の要約と横断的レビューを行い、開発途上国全体でのエビデンスの傾向を整理した。そしてその対象文献リストから、サブサハラアフリカの教授法施策に関する文献を抽出した。次に、これらの統合レビューに含まれていない新規文献を抽出すべく、アフリカ各国の国名と教育施策群のキーワードを用いてデータベース検索を行い、抽出されたものを文献リストに加えた。これらの文献は同じプログラムに関して書かれたものも多数存在するため、プログラム毎に再編する形でまとめ、横断的に整理し、考察を行った。

## 論文の構成

### 第1章 序論

第1節 研究の背景

第2節 研究の目的

第3節 研究の構成

### 第2章 調査手法

第1節 既存の統合レビューの統合レビューの分析方法

第2節 新規文献（サブサハラアフリカ対象、2014年以降）の抽出方法

第3節 抽出されたエビデンスの整理と質的分析

### 第3章 分析

第1節 既存の統合レビューの分析

第1項 既存の統合レビュー群の概観

第2項 既存の統合レビューの個別概要

第3項 既存の統合レビューの横断的分類

第4項 サブサハラアフリカ対象文献の抽出

第2節 新規文献の抽出

第3節 抽出されたエビデンスの整理

### 第4章 考察

### 第5章 結論

## 論文の概要

本論文では、まず、全世界の開発途上国を対象とした初等教育改善施策に関する既存の統合レビューを13件抽出し、その概要をまとめ各文献の結論を横断的に整理した。その結果、学習成果を向上させる施策群の中で、体系的な教授法や児童の習熟度に合わせた（補習）授業といった施策が、多くの文献で効果が高いと認められている信頼性の高い施策であることが認められた。

更に、これらの統合レビューが対象とした文献の中からサブサハラアフリカで体系化された教授法施策のエビデンスに関する文献を28件抽出し、また、データベース検索で新規文献を10件抽出した。

このように抽出された計38件の文献を、対象とされたプログラムごとにまとめたところ、サブサハラアフリカで実施された教授法施策に関するプログラムは15件存在することが明らかになった。その全てのプログラムについて、その概要をまとめ、各プログラムの構成要素の横断的な整理を行った結果、15件のうち10件で授業計画が、9件で教員へのコーチングが採用されており、続いて習熟度別の（補習）授業が5件で、教科書やドリルといった教材の支給が4件で確認された。

しかしながら、その効果は様々である。授業計画は中程度以上の効果を出した6件のプログラム全てで、コーチングも同6件のうち5件で（うち1件はメッセージによる遠隔のもの）用いられているが、一方で、この6件以外で、この両方が用いられながら、効果が低かった乃至は確認できなかったプログラムもある。これらの結果を、効果が高かったプログラムを真似れば良いと

いう思考に陥るのではなく、むしろ、同じような施策を行ったにも関わらず効果が出ないプログラムがなぜあったのか、その要因を探り、更なる示唆を得るための材料とする姿勢こそが重要であろう。

他の留意すべき点として、効果量の多寡だけに注目するのではなく、その結果が導かれた理由や状況を理解し、その結果の計算根拠となるアセスメントの内容と特性を理解することも必要であろう。また、同じ施策内容でも対象となる児童の出発時点のレベルが違えば効果が大きく異なる事例があることから、施策が生み出したインパクトの差異だけに注目するのではなく、その施策が具体的にどのレベルにあった児童をどのレベルにまで導くのに有効であったのか、というような児童の読み書き・計算能力を絶対値で捉える視点も重要である。

更に、コーチングや教材開発といった施策もその結果にはばらつきがあり、またいずれも豊富な経験と高い能力が求められる施策のため、その中身の「質」に対する視点も必要である。関連する議論として、スクリプトされた授業計画は教員の自律性と能力開発を阻害するのか、もしくは逆にその発展に資するのかといった議論があるが、より本質的には、コーチングや教材開発ができる人材も含めて、教員という大きな職能集団全体の層を質と量の両面で長期的に厚みを増していくという大きな目標にまで目線を上げて、そこに導く施策の設計検討に資するようなより高度なエビデンスの蓄積が待たれる所である。

以上のように、本研究では、これまでサブサハラアフリカに特化した形では十分に行われてこなかった学習成果向上に資する教授法施策のエビデンスについて、システムティックな手法で文

献を包括的に抽出し、既存の統合レビューと合わせて統合分析を行った。その結果、15件のプログラムを特定し、横断的なまとめと考察を行い、サブサハラアフリカにおける教授法施策に関する情報を整理された形で全体像と共に示した。このような情報はこれまでに存在せず、教育政策決定者や研究者や援助関係者の意思決定の障害となってきたが、この研究を出発点とし、各関係者が、どのようなエビデンスが既にある、そしてまだないかを全体像と共に把握した上で、次に何をすべきかをより正しく効果的・効率的に判断する一助となるものである。